清不老語

上

二十四

特別
へ12
4327
1

〆リウカク風ニメ ホソヨ風トシカテ ヤトモリ風ヨノコシ
セタ風ヨ帝 山モリ風右 花ソノ春ニ会 弘風ヨ左子の女御
カタケ風左大只常 ヨリメ風右大 近常
右十八丁ニアリ
○道思フニ十五ノ七人目仲忠ノ前身ニ
ワカ君ハ十五ウ○十四ルタイソム公ナ尼仙人

下ケ
俊景上紺本オ一上
白本オ一上
陽本オ一上

校合凡例

朱もてたゝ〳〵とあるハ白本にあるまゝの字
又ルテ朱もて傍にしるしたるハ白本の誤
墨もてたゝ〳〵とあるハ紺本にあるまゝの字
又ルテも墨もて傍にしるしたるハ紺本の誤
たゝ〳〵
紺本ト今本ト同キ字
たゝ〳〵
紺本同キ字
青ハ道ヒカカレシ

遊仙窟に清音呦呦(ケウケウト)序時(ナリテ)則梁上塵(ヒヤリ)飛フ
注劉向別録曰魯人虞公發聲清哀若動梁塵
又
顔鏗(ニメイテ)鏘(ト)卒爾(ニカニ)則天邊雪落ル
注列子曰鄭師文彈琴ニ哭ニ羽ニ絃ニ以召黄鐘一霜
雪交下也
○右十九丁表かゝの五ウ〜六オ
ゝのあゝ川へし

〆 リウカク凡ニスメ ホソヲ凡トシカテ ヤトモリ凡ヲノコレ
セタ凡ヲ帝 山モリ凡右 花ソノ春ニあ 弘風ヲ左ニあの女帝
カタチ凡左大只常 ヲリメ凡右大 近常
右ナハチニアリ
○道思フニ十五ノ七人目仲忠ノ前身ニ
ワカ君ハ五ウ○十四ルタイソム公ナ凡仙人

下卷
俊景上 紺本 才一上 白本 才一上
陽本 才一上

校合凡例

朱もてちうトさるハ白本にうき事の下
又ルテ朱もて傍ニも凡るもちうすハ白本の流ニ
墨もてちうトさるハ紺本にうき物の下
又ルテも墨もて傍るも凡るもちうハ紺本の流ニ
ちうト
紺本ト今本ト同キ下

ちうト 紺本同キ下
青ハ道ヒサカレウ

門へ12
號 4327
冊 1

昭和一一年
吉田早苗氏寄贈

ちひそんやう ト紙本ニヨリ

七番ノカナヲケシタルイカヽモシなあるもカヨメルカ左行ニ
そとゝせとゝそ

しゝ式部の大輔たゝ平うあそん。満仲の大君あり。
御ふくろよ。ぜんのみこれさとこさこ
とうたうみ。ちくさいてあるし。ぜのそ
んやうとみむして。ふくさとしたいひをしあること
りまして。ぜんしうとあわしたあ
ちくんうみ。七男なり。父ノ言葉人
よわふよ。ひるくとせたるみちくとりてこそこ
ちふこをはたらうつ。きれいぜんやあさあめ
くおやしうめつくしこそいてこみんと
ぜりひかりよ。十二男ふたりあるしつこうあ
つまうこれさくたるし。ふみむと

門へ12
號 4327
冊 1

早稲田大学図書館

ちひさんやう 紙本ごり

しゝ式部大輔たゞ平うあそん。清原のたゞ君あそん。
御ふくろよ。ぜんのみこ。一人りうち。ぜんのそ
とうぢうみ。ちくさいてあるこゝろ。たゞイ
んやうをみむとて。ふくさとしたるこゝろ。
こゝろをうて。ぜんしうをあわれがるあ
ちくんうみ。七月ばかりに。文ゝ言葉人
よわふよ。ひうをせうとて。ちくみ。文
こゝろをはらうつ。きれいやかあさあめ
く。おやしうめつこゝろ。いてをみんと
ぜんひかりよ。十二月ばかりに。ちくあ
つきこゝろ。ちくみ。ふみむと

昭和一四年
吉田早苗氏贈

或説ニ理法ノ文ナルヘシト去ル キケリ

イヒテサミノコキ[illegible]ミモ又ツヨノ
[illegible]ヲホムルミモ五旬今ハ後景
ヲホメテラ[illegible]ヘルニ

門人

雑

出

中臣

行

俊景

題

度

特策

仮名あたるなるべし[illegible]

くるるなら武弘亟

興カ

興カ

三十コロニ二ツ眼ハ至テ大切
[illegible]ナルニツアルヲ吾子ハ
八三人ナラウハナレト父母
思フナリ

三

十六

門人

雑

出

中臣

行

俊景

題

度

特策

三十コロニ二ツ眼ハ至テ大切
ナル物ナレトニツアルヲ吾子ハ
人ニ三人ナラヌハナシト父母
思フナリ

白き馬ト紺本ス

よのひみんことのうれみちよりてこれ道出立ちこと
しけるこゝの四の角にて三人のひとひとつ
どんてのこと出をはりてそこにて出つるよ額乙ふよう
ぬりろこにてこゝにひとりそこにおこの風吹く
こうあり糸文ふこりいとこれぬぬりこのこうこ三二
ぬりこうにこしこあり身を彼斯必よこうこれぬそ中
の玉乃ぐさんこらこせこ出てたこうこれこさ渚
よこうこことこうこてゼ墨こうこうこをつこうこう
ぬ女ぐんぐ考ひこうこまこと観音の中誓をはんじこて念
まこうよこうこあこさ獣ぬこんこぬこぬこぬこぬこ鞍
こうあこれこひま出鳥こて出こてをこうこひこうこてこいこう。

やこうこあこうこびあこうこじよこるはこつここうことれ
こあこうこんこうこびよのせこくこびよこいこでこさこく頸清
こここさ林のこじこんのこぬよここのこいこをこて。太
三人こすこびみこて琴をこうこさあこうこここぬこぬこあこつ梅檀虎皮
こここくこひこここうこえこうこをこあここここうこ失消
こんこここ

三人のくるしいとこいろむせるのくるしさ
ゆえ日本の五代使清原氏とうりしら
ゆきくるしくとふ三人表こゝろ
ゆえ三人のくるしいとこいろむせるのくるしさ
ゆえ日本の五代使清原氏とうりしら
ゆきくるしくとふ三人表こゝろ
ゆえ三人のくるしいとこいろむせるのくるしさ
ゆえ日本の五代使清原氏とうりしら
ゆきくるしくとふ三人表こゝろ

ぶ・琴(ふ)・音(ね)・たくらべ・さまざまの・ことの・ねを・ひく・
て・ものを・うくに・三年・これ・まの・琴(こと)・
ちくに・己(おの)・ものの・いくこと・ひく・ことの・琴(こと)・ひくこと・ひ・
ものの・四(よつ)・ものの・ものの・四(よつ)・ものの・ものの・ものを・
よ・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・
ものを・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・ものの・
世界・琴(こと)・音(ね)・琴(こと)・琴(こと)・琴(こと

ぶ・松たくさ末うるとちのて・こゝ代のさうと鳴し
て・すをとうくに三年これ末の秋ゝて・年月ぬく
まくに・おのゞいくこゝの琴よひくさゝうとゝう西
そふ秋よくらゝつのゝとゝ四のゝ作りてをゝうくに
よゝくこゝるとゝる世て山ゝて・天地一よゝ西ゝまて
海をとゝいをさよこゝの琴のねゝようゝ子ゝをゝきれをゝる
いるゝ世界をこのまれあゝゝじ西ゝ秋くいうくこゝ琴
一ひゝ此れゝづゝうえむを作りのくゝゝうあ三人の人よ
いゝ海をゝいくゝどのゝ斧人のゝゝ西ゝうゝに疾れゝゝと
いゝてゝこゝれゝうゝゝとゝけゝて・海河ゝゝねゝゝと
ゝえくゝのゝゝうれぬゝとゝあゝうゝゝをゝれぬゝ三年

ゝとゝふゝゝの蓋ゝゝゝくゝゝゝよのゝりて・こゝゝゝ
ゝをいゝてくゝゝゝ

阿脩羅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みくるへしてとス

あるこういきものこうしてとてうしらあるくこ
てこあるこうしけまん初のつこのすいとくおまそこうこ
ありこしけ中虫こうへこと人のあらこことわこう
よこ世代山けりこうよりけこうあこのいいのこと
けけ食こせこうとはそこ世こうこいこにけりいてこ人の
分こうあこくあんこうこいこにここ世こをみやこう
そけこうこと世こ海眼こと車こうこ海のこけこくこ
海こここ世代輪こくこくこいここいここ
あるこうこことおこここ世こはここいこ
まここ世こいこ岩海こ世こいこ出こ
こあ中こけ中ここいこ出ここけいこ海こ海あり

ひこけこうここけこをつこあこくこ世こ
むこいこくこりここの世ここここここここ
ここここここの山ここここ世ここここ
つここ日中ここここここここここここ
こここ犯こここ五百兆ここここここ
ここここ五百兆ここここここここ
ここ四ここここここここここここ
ここここここここここここここ
こここここここここここここ
こここここここここここここ
こ

きたちとのうえ(むと)ていとくよ。やてうあうてぢう
ていえく。日本(ひのもと)ちりやまとこりあるうやいるう(佐)
んえくいちくくくうひ(愛子)ひとりて一せひ(せい)ひとりあ也(ゆ)(親)
ものうりうのあつく(恵)(じん)のうりうまうとうとくあ也
ゆりせれのうこうりふりてりこまるとゆのちくく
(ムこ)(ムこ)れのあうこまるりてのおりく。ゆんぢ不(ふ)春のみなう
はゆやよあうこうのけりさあうせよ春のみうりおさ
れゆりいのあうれいのあいむうくとの紅(おい)さるをゆう
うあうこれ風ゆりいるうみよあいくともうくとや
ちりて一人ちうぬ世(世界)のよたうこのいくうりて(久)
うりぬうちれえ不(ふ)春のうこれつこのかあうまむこ

らうせる
板摺本あいやうトス
ゆのうんとるみなる
ゆんじ一ツ行カ

およひ
つほうるうあう

めよ。たふ(ふ)ちうく春れ(ら)とうを紅(か)ちりてどうちうら
ちうちうくれて琴(こと)の変(へん)をとうせて世のうこと(か)
ゆ(ゆ)ひとりてうれよ。あちうくゆやまをくよいるうて
いうくうんちうれゆうこの命(いの)をとうんうそも。この
本一世(せい)ちうくうんうれ(代)その花(ゆ)いせのちうく仏(ぶつ)にるり
行(ぎう)日。あめ見(み)うみこうちうきて。三年(ねん)ゆ出(で)うたふ(合)
天(てん)音(おん)青(せい)愛(あい)ぶ(雅)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)て植(う)木(き)ちうこてをうちう天
世(せ)ちうあ(ゆ)ちうくゆ春(はる)ゆ海(うみ)(そら)ゆ方(かた)初(はつ)のつをうちうくれを
世(せ)ちうくゆ春(はる)ゆ海(うみ)(そら)ゆ方(かた)初(はつ)のつをうちうくれを
むせ(せ)ちうゆ(ゆ)ちうゆ(ゆ)ちうゆ(ゆ

さだちとのうえむとていとまをよやてうあうぢう
ていえく。日本しりやまとこりあるやをいるう
んこえいちくこくこくこのひとりて一生ひとりをもやを
ものこうりこのあつく。恋慕のちうちうとこをこをこのの
ちりせれのしこうちふりてりこまるとをのちくこく
紅のあこをまるりこてのをつく。あんぢ不巻のみなこ
はをやよあうこうをけきあこせよ巻のみうこおさ
れをりしのあこれこのあいむこくこの絵こさこをやこ
こああこれ風をりいるうるみよあいくこもこくこと
ちりこて一人ちこぬ世をいたこくこりこてこく
こりぬこうれこ不巻のこくこれつこのかあこるこむこ

らくせる
板摺本あいやこトス
北のうんとるかな
こんじ一ツ行カ

めよたこうこく本れこうこを絵こうてこうこ
うこうこうこれこの変をこうせてをのこをこ
絵。
をこをこをこをこれよ。あこをこりやまをこくこよいるこて
いこくこうんこうをこのこの命をこくうんこてもここの
本一ををこくこくこくこのこのこをこいせのこうこく仏にるこ
絵一回。あめこうみここうこうこて。こ年のこをこたこめこ
天女青変こをこてこて本こうこてこをこうこ天
女れこ海こくこをこい海流所の方初のつこをこうこれこを
むこ世こふこうこのここここ枝こい是年こものこ北この
ををよこたこうこて三こうこうこてこうこのこうこい三賓
こうこりこりこりこりこりこて切利天やこてよこをこれこむ。

こつくりヨリ　抜摺本ニたつ　トス
一本のうた　一本カ　トス
一本のとくりを　トス
一本とくりを　トス

中のちかいぶたの世やよむくひ（下）りのちるを花は物
志のみとをしらく（心）のんとの物ゝ本なり。河海（あしから）を
ゆりるとしあるこれくゝ書い花（園）の秋いりみられ林よ。
天女（寺）ちりゆくゝてゆきの物面（ナリ）たるやちくゝと
ゆるをこゝぶたを（イ）あるいんやそこぐくれ年服（きく）な
ゆ（ちか）りしこれらる（ちか）ぶのつをわらわるむあゝと
ぶ（ヒ）の（ヒ）ぶむゝて。風（ヒ）をこつゝゆるを。かの（あ）ぐ一ふらと
ず（ヒ）ぶ（ヒ）ぶくゝりてゆ。ゆむぐ（ヒ）一ふ（ヒ）ゆゝゝ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）
とゝ（イ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）
のゝくゝ（食）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）
の（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）ゆ（ヒ）
ゆ

ナカハラニツニ作レル三才ノ琴ヲ作ル其中ニ見ノ木ヲ中ホトノトコロヲ以テ作レル二ツノ琴ノハコトニ声ノスグレタルナリ

たまたまうまれぬるに、たなばたつめ（織女）をしらせけさせてのち、つねにてをのこと（緒）にたりてやすらうあこのそのしるべにわたりてまつるをむしろの林よりうちのく。

このこはだ（西）をとんとそいてうちぐしよりゆせいくさうそ。三十のこと（ゴ）ちかうそこそこそ（れ）ぞくみちよ。二十八そ（ソ）ぬるし（シ）ぬ（ル）なるに、たちつつと二よにらまるいぶくつまを地ゆきさけうく。すぐ（ヲ）山ひろよゆきりあひぐ（七）ちうあ（崩）ぞさうくもくしさやしにひとり寝そぐ（ル）ぞ（ル）ぬ（ル）ぬ（ル）ぬ

○ヒトクロツヘキ　族可ニ
家ラカコスーナリ

まふとうをたのまるる所生なりうく仏の
うまの法師ともうして志めやうなる所とおもひ
ひく年ころあるとなふ夫女はいとく
らいまれくの世のふ所をなんすれとみ法なりう
天のおとしてきて有めれさにこひきてそこうつ
へき人よるむをきる我をむりいさうなるを
しるそ。ふくしまの西備のれ所ならは東なる所
くうりて。せとせみてそこよ我ゐ七人とありみき
世の人い極楽浄土のふよ。琴ひきわりせて海
そふ人なりそこよりてその人の我ゐき
りて。日ゐ五へ海りまへどの三十れとれ中に数

海さうるそ民我なりく。一をいをん風とくひと
りといをー風とく。この者こりのこ我いの山れ人
のまへそぐりに者こ生ておさ人よきをそと
の法これるりのこれ書をん所よ婆婆世界也
ともるをとふくうんとの法ふ。とう者を人
の法よきをいく我をのもあをしてゆをい。
ゆかいるる川をそのほもり孔雀いをそそのの川
とをとをつ。こをは是ゐのは風をうるそれら
みへ行ハ若をそのの若もり說いをそをこり。
こをいは風をとる川をそれもりめ西とるを行ハさう
しれ山せるそのの山をもり仏人をそをこり川をそれら

まさい 一本
一本 キカ 泉トシ 屋トス サイ

みかと

あとゆい 虎狼ひとと山さ(ロ)く 雨ふるさ さえ 出ぶく
ゆの山紙ちーつ そんれちゆ(ゆけ)ゆ七の山ち
ちゆ(ゆ)の人きて つひ ひーちくよとむ雨よちちぬ
ゆちりとふ山をみ 雨ふ とむぐんの木ゆ雨よ 林
よ花をおりしきて 雖(たく)ゆ(ゆ)人 年三十ぐちちち
てきて(アリ) ちゆ きちちぬかりむ 山のあちゆ おわれよれ
ちちちくられいるむその人そどーちゆ雨ちて 清泉
ゆちちゆ海(ゆ)ちちちゆ ちちちゆ(ちんゆ)のちちいちち
ちちるむ(そ)このちれよ 山のあちゆ わちれ 蓮(レン)花ゆれ
その(を)ちちゆやゆちちゆ 山の治雨ちち(ゆ)田(いの)ゆ みとむそ
ゆちりちちきゆ仏のかちゆ治ちんちちもたちちく

ちて 風(オナシ)ちのぎよちん(ス)く ちちのちーを(ちく)あちゆ治ど
ーちゆちちーゆーちちのゆーを ちちーくゆ(ちち)ちちて 治
ゆ風(例)ゆのちちく琴(ヒイ)ちゆ(ちち)ちれ ゆ(ちち)ちく(ちち)ちり ゆ
の時よ 山ゆ ちちーちちあちちちゆ(の)ゆ(ゆ)ちちゆ ちれ
ーゆ治ちて ちちゆちちちつち治ちて ちちりちちゆ山よ
ゆ治ちゆよちれ山のあちーゆちちーちちゆ治ちちちち
ちのちちちち治ゆーちちゆ蓮花のちれ花のちちと
ちちゆ人のちちつゆ(ゆ)ちちのれ華(ゆ)ゆちちちちれ(思)ちゆ(乳)ちゆ(房)
ーちちゆるゆ(ゆ)ちちくゆ(ゆ)ちゆ治ちちのゆ人ゆ(ゆ)ちゆ(ちち)ちゆ(ちち)ちゆ(アハ)ちゆ
ゆちて 三人ゆちて 三ちゆ山ち入治ちちゆちゆ
ちれ治ちく 四人ゆちて 四ちゆ山ち入治ちちゆ

○紺本 五人ゟ六人ゟ八人ゟ
ナリテ四人ゟヨリ七人ゟ
ヘ飛テ去リ

地のうちの法師、あ人のつ里て出く入給、そこもと
地のうちの法師、六人つ里てあく入給、そこもと
あうちの法師、七人つ里て入給、その山ハさいふこと
ちり、山の地い踏場ちらるる紙みまはしかいこと
よりみちをそれんづるこにわうに、浄土ハ
ハ梨風よりつるくちるくるるハ人よハ乃
名乳薩つまくめそふ所よ、七人つ里く入給てその
山ハあうとゆゆみ給、山のあうちらびうこちら給
うよよかうくゆ給、四年ハ人蓮花のうれその
うちうそうれど、地のうちのうつさよるむ、花
その地をあう人わ里ハ、山のうゆゆうちぞりてお

くまでうつうちの法師よ、山のあうそうあよ
の法、地の里ハてよ、ちうち法うち人のれみとも
うち、この山よち法く、七年ちみ法うち人のれ、一年に
一人とあうう七人のうちもうくちるまみさ、ゆのうゆ
てけるさをえうちうう、うう法みうちうちふさ
のうちい法うねうちうよいとうるれうもゆうう、花の家
うくやうちうう、ちりみうちと家うちちふううあみううあり
あれうり、地やうてよう法うちのうち、あうち川ハよつもうう
うう里法うちう、うちう人ちうるうさよ法めのうようう法
く、ううれうちうやうう、うう里法うちねうのうにうけハ
うれうち法うちひうのようむ、まうと秋ううう法

却

親

なりて、花そのもとにうゑおきたれば、やがて花さかりとうゑおきたれば、やがて花さかりとうゑおきたれば、やがて花さかりと

五八生 一本幸トシ
一本八生トス

ひとつにあつまりて私幸
天のんとうれみさいざわさらしちん福のむく
ひのようくどの衆生よりかりふうらしをのうふやうく
ほとけのようちうこの日の中の衆生に生せしよ
人の分とうくつきものはあるいたをの私いうみてい
つのんの世よりんうくのつくりうるしうれい梅恩
しつうしんうちに八生やうしんうちよりめく
ぬ八生やうくしそのあるうくさくしんひとのをを
くつくさんうにちなまてひしるとふ
しん私んあうきそのほんれうくこい菁慳貪邪見
ちうふ生をてあうひくうるのをちやくしをたれう人

ひうにたうくしに疾瘦時ありきそのくさに山畑人万慢河
河の衆生よりうくを施て善勝泥洹尾を生おこ三
時うくたいつてあるとりきそのとれう
日本の衆生三年ありきそのとれう
くみをしそのほんれうくの私よりしてこの畑人よりあつこの
人の分をそうたうり梅恩生死のつくをわうれうて
人と供養しうあもいつもくさんの分をうきんこ
というくしとりんもいつもくこのこのよりく仏菩薩をまと
うしまだい邪見のうもくにあ辱のんをやこと
ひうゆんよりこの山乃七人のこまうこうをわうりて天
よりうるべしまの衆生この国滅よりせくせた

五八生 一本辛トシ
一本八生トス

ひとつづつ[国土]をうしなわさるゝふもちて[自然]ゝ辛
天の人とうゝれみさいざわさらゝ[自然]ゝ福のむく
のよう[国土]ゝ[自然]の[国土]ゝ[自然]の[国土]ゝ[自然]の

れよりあいてそのうつのうときくぐゝ・きこの山れそこう
七人よりあるろ人と・三代のむすこよりはて・その孫人の
ろくよりやうろ海ーきゆるれどこの日れすとりあるよ
腹
繁ひもろ人ろいんえんをようりてその
因縁
ぐゝ・ぐの絵・ぐれよりあるそ人おれ絵ーしてまつる
ろ色ふの絵こを仏ちろ色わてまつりて美
滝よ一ぐく出てゆ海ぜるつろくにのり風よ
ろひきてろり絵よ・を池ろんどゝをうくてろ海を
いあいの日年へろくひとけりよこの七人の人よこと一つ
ろろを・七人紅のろくをろうてれ行ーむろ海を
いきてみてろ・七人の人の絵メ系して・孔雀ひろ

しく川のやろりきてそくるそれりろとて乃絵
やまれろ口のりてきそとろてきつきわれ
と山ろちをぐよりてぬもぐるれど・別のろのひ
よあきてぐれきろ也ろて日年をを
ろりてきつろ人をろくいとむこの絵て・いてく
ろりろりをはろりろ多川のろはきりくうろき
法
ろよいものぐふさのちとてはやーてこの名を
琴ア
ろろ・一をいはろりかく風・いまをろとはわそを風
いを一をいやり風・ぐをこ山より風・ぐをそせこ風・を
いれそのの風・七をいろろ風・八をいろやを風・九をあて
きの風・十をいはりめ風をとれつをく・七人の人ろりぬ

名つけ　つレトス

日本紀五八十四
云荒岐千トトル
コレヤリ〳〵ヒ井　注〳〵

とうとうあるくまは、例の法師風にてとて出来琴
つくりて女の名つけ法師〳〵ゝ
とどろとうくまれあぐつくりぎ三年ゝみ〳〵
山よりうりてこの海をうりて月日のうる海をと
うりをつふりとよ法師風この海さわぎこの
こんのいみうるまよとことやこてうてゆう
ゝこのこゝゝゝゝこれくく琴
よ一ゆくこそまうめつくりうりうふまうり
ゝ〳〵くてとうを四ぶつうんとて法斬國法
つゝぬその西れみと右ちを儲をみよこれこの一つ
ゝそまうるみとゆりさうりまうさ法てとゝを

とゝそまつまうよこのうゝとうをこの法その
法ゝ〳〵あこそまつまうこの琴ゝこゝあり
こつゝのさゝゝしてこそまをこの法人のうれ人
うれゝこうりて知こくゝりようり我のりていて
つりていいこひこのこゝゝこゝうゝ西ゝよ年八
十果ゝうゝ父母作ゝ法ゝみこそこうこうあさ今
いううこゝゝ灰みゝうゝ作ゝまゝ散ゝこぐこ
まんひこそゝんいこ法ゝうこゝこゝこゝみこゝあれ
うゝ法ゝいこゝゝをゆうゝつゝこゝ糟役
くゝ廿三年とつゝゝ廿九こそ日西ゝこうこゝこうゝ
うくくれく三年ゝくくれて西年よりぬこ

父　母

ふしをるをきれ
ぶ
ぶ
ぶ

ひとりをもたれ給へるもうしろめたくて、三年ばかり
とゞまりゐ給へるものゝとりさたもなれどこゝろいと
ふかくなりぬ。ものゝこゝろ思ひてこゝまうこゝ
ろあべき給へるこゝろ世のふつうにて
あるまじきこゝろそこゝろいみじと表ざうを
うぜさ給へる。或アの殿よりゆるされぬ。あとよりゆるされ
ぐしたまふべきさうし給せらるゝかと
に。みちのくにゆくゆくのことさえ
うちとりてこれをさうしの人をめぐらせ
へりしをこの殿つねをうしろめたく人よりとられ
まれぬるくしとひとりのこゝろいむこ

ふかせかし　一本うはせかしトス
一本うはゝーかしトス
ゆくゆくヒトリ　即ウルハレアリ
月語ヘリ　ヒハ誤ナリ

よ〳〵と　一本のゑ〳〵トス

うませ
○コノ女子ヲ假ニ清氏ト名ツ
テヨリ　ヒトリノ目下トス

よもしくとゝ人べと。仏のうくのつこりれとてそ
の殿のこゝろくべつてこそこゝろくこゝろ
ゝ事ゝ人よりこゝれまつりもとえくそのつこに
女子ひとりひとりまうけ給へるこゝろ
しる伝ふこゝろて。或アの殿ゝ事つひを
め四ヤつの年の殿ゝ。ゝ事ゝ殿ゝ
ゝ。ちくゝ事ゝ殿ゝ。ゝ殿ゝ
ゝ。ゝ殿ゝ。ゝ殿ゝ
ひとをあよくゝ思ひくゝ。ゝ殿ゝ
ゝ殿ゝ
人ゝ殿ゝ十をゝ殿ゝ思ひむとめ

おとろへしきおとろへしき

のよにおろうとをもいわづらそやどりうせとうのしを
のうていつもをとりせくゆめうつつそをもをたこう
とひそをまつるゆりの風をいたこのうちをまそをまつる花
うの風をまをめてまつるえこ風をいまをえの女
御よそをまつるこうせをいたこ白さんしてつるまそを
まつるゆりの風をいたこ右大臣ちのゆめまそをまつるみ
しこくをもうたこ絵をかよゆまつるさ絵つそ
ゆまつるさ絵てのかつくこのこくよいこうそをかくこう
そてゆまくくてくゆめよろよこゆもうゆ風ゆをもるう
ゆまつ絵よいこうくこのいうそこうそのかとれよを
しやくと歩くそこうれ

引本つゐ曲げるトス

二ゐきたがりて

（下ヘステテサガリ曲ガルヘシ
ミカドハサガノ傾ンガルヘシ
下矢ヒカ十七フニサガノ曲リ
コノチスコレツタヘヨ所ニアリ

海門はりさにはしらせ行くゝ心ぞーわさもてわ
ちとうたりあ。うれ（九ウ）ゐ翁まさるれをるひあ。
くのくしてまの主はりせ行くくさよそ
をたさ風を行くいうかれるーて。ふ（二ウ）一を引の
よ殿のくのくたくくそぐけてなのくくらゐ。ゐ一
ぬうくまつよ。六月中の十日ぬれくよ。君ゆきものこ
くこ（五ウ）で。ゐ凝ゐとはりさよみくつてのたげよ
これたくくいうらくさよ（下ウ）りう。これいゆ（ウ）らくた
いてたらくせこゆくつくふ曲ゐ。りらくれみ
くのいさふよ。ゐ（九）くくけて雲ゐくんいひ
ゐこんくうくいゆさくねくれやーうゐくしき

人のさえられひくこてのんくをくみものたれゐくう
しうをくれるくくいつくさをもそのみちよくゐ
いそをもつくくまちらちゐよ。ふそのたをこた
ぢうくゐ。そのをちいたかりこのくいこれくみくや
くゐ一人くをきれ。そのを（ク）をくく（ア）をの師をた
くくまを。ゐをくをりゐ（ア）師ゐかりとりのくし（セ）ん
人のゐむくれくさんくよゐくを。くよゐを（ヘ）をくのくを
てゐくつくくまくくせくぐ。ゐ（直衣）の行くくいをむ
くの行くくさ（エイ）くゐ。ゐ帯いくくゐれかくたくを
をくゐれくりゐくくくゐくれぬけくの風ゐやいたゐ
ゐよくぐゐくれてくくぬくくくくくせ（ウイ）ゐくさ

引本つゐ面ばるトス

□ゑきたかゝて

海門坊さに出てゝ
ゝ行ゝ
ゝ行ゝ
ゝ行

○載安道破琴ヲ不爲王門伶人意同

うゐかうれよりそびたちうるはしくてうちまもりてうちとけてうちとけてうちまもりてうちとけてうちまもりてうちとけてうちまもり

きまらんいせ物語心とゝいへく。これ人のたまへとみく
みとゝ。ゝられを。嵯峨門院いめうりてゝ。ゝてみと。ゝ
ゝれ。ゝとも。ゝられ。仮名。ゝの人。乃はゝひとあ。あた
くゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝて。入。ゝ。ゝた。琴。ゝ。
りてゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

のをいとうあるとかそのことわりをみとゝめさいゆめ
ゝくみんよみを給る。さてそのことをとくんめるのれと
琴
のよりいすして。すぐさまのたゝりとうちいたあ
らいそのさいをいさいあんとれとさつひさいまうあう
ゝ能のときいのうちうりていのられつまり。ゆきさう
狼　熊　獣　虎
ゆかりうちそこりのよりとをとをとをとをとくて。きさうの
よりをとをとをとをとをとくて。ゆきさうの
施
おかたりめぐくらいいまのうにつみさめを見給ぬ
らんとれよこれとをとをとをとをとをとをとをとをとをとを
いそのみ十罪のうちよを給ひんよをくうくだた
まりおたくのかりそくめいをんよをぐれくうかれ

よありのおまへと。ゆゆこゝをたえいりおりまこと
遺言
ゆかりうちりひよめれともすくなりぬんと分をを
乳母
づをりかんをよ分のくもまくをくうり
使り
みうばいして一人のつり人ものうんにそこが
のてゝせりつびくりのうをちうぬぬ一人のこ
清年
ゝくりのゆをうくつまりきれいまやゝみを
ひつをうくれをのびてあまぐんをうをうりと
ゝいくゝうりの泄をの人いやゝりうりう
つまいゝ寝度をうりのゝものをまるくてゝみや
野　塩
ゝまくのゝやゝまりぬまいむをめいそぐめれ
ものをうりのうゝすされちをやよゝをうゝをそあり
従者

ろとをもとめてつゝひろ
ゝをもとめつゝひろトス

ロトリ以ヘカミニ先祥トリ
又錯シテナ可考

ロ女ハ女ニ云ヒスガノムスメ
ミ　元ヒ)ト文ニモ只女トイ
ヒ所オホシ皆姫ト書改ム
ハキラト文ノハ原ノニニニオ
カラカト云改ルベシ

ろとをもとめてつゝひろ
ゝをもとめつゝひろトス

八月中旬十日ばかりの事なり
三十一日名高佐の三十二ノ忠臣ノ
さほうふ
うて八月中旬十日ばかりの事なり御祝儀
て、うたをよみうて始るなり
うまれをいといなめ
らりやうてこれらうきの衆れまへ
へうとうたをうたひ
のりてよりうてみうにおそれの人れ車うてと
うてうたをうれうれうれひく年女うう
多のの比ひまうへ
大臣家の四位うよ
うまうたをうたうたうた

うて、月中九十日くらゐ、ふとりの去る所、御所をて、うをよ海うて、給ふるとゆ、人色いろう、例のさわうゐれをいとめしうてこれとうをの衆ゆ、人色いろう、いうめしうれまりゆうてゆまの人色いろう、いうめしうれまへうをうくれを給をみうとて、これをうとうくのうりうよりうてみうにおその人に車うをうをうそうくらをくれうくうれうまれうのくゆ年ゆうりのゆうこ、ゆうこ十ゆ家ゆうて、うゆゆしうるうしうゆうこうゆうこのゆしひまうへゆゆうくてうううるうとゆ

大臣家の四ひろうよひうゆうりうを給うらくゆうりなくうゆうこを給てうくうをれゆゆうるうを給うるゆゆ

ヘリ　ツヨクナビク　カミ　ツキ
カヘリ　キヌカヘリ　レニカヘリ　ナトモ
ヨツヨク　ヒニテ　実ニカ
ニアラス

カキニ五五ハル人ハ三十一ロ　多弟伍君、三十二ノ忠正ト
ハル人ニ五十九ノ右大臣

四月ハ
ほれよりの人カ

カカヅ君ハ下巻五十一イ
カキニサト三人ニ五十九ノ　大ル

ありそうなこと君とこそ
ひとりいとてくるつ
つ・まくらなれよ立ちつる人のわやしくまくと

後に兼雅臣人ニ

尾花

吹風のまくすすきしく人の
袖こそ川ろいとてとうり
みる人のまくなるこん花とこそ我袖そとい
いつね拾うとてとうり
こそあやしくめてこそ
しらられとみ
しわつこ君長とこそ

清平

いとてとそれ
ら
うんいそうんと
こそ
秋の花
とうりよ
ふきし人のいそ
のおれ
まのとこ
ひとりて
地のうさに月
えん

御社

神

俊景

なりそりのわるき君とるゐこれあるさま
なるらいとめてこゝろいろさうろの地をくるの地をこり
つりまゝくこれよ之給つる人のわやゝくまゝくと
こゝろのこゝそ

忠雅 吹風のまゝくうるゝ人の
神こゝろいとてこゝろ給ふ

兼雅 みる人のまゝくなる花こゝろ紙神こゝと
いこゝ給ふこゝこゝろ給てゝ給よこれ
こゝ思ふこゝくめてこれ人こゝ思ふこゝ
こゝろれとみ給よこゝろあやこゝろてこゝ
こゝわこゝ君長こゝまゝと思ふこゝ給ふ

いこゝてこれ給ぬこゝてこゝ給てこゝ
こゝこゝこゝ給よ御社神わこゝ君ひこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

風ふきてぐもりくるよしのゝあらさまくさらぬ月のくまなくあられるりゝの袖にうつるかをるかぜにたゞよひてゆくへもしらぬ雲のなかにとぶらくるまゝ

景雅

ゆくへもあやさ袖をあらふよひをもあはれなりけりとに

景雅

ゆくへもあやさ袖をあらふよひをもあはれなりけりとに

やれりとにたちしるまてゝ人をとゝくとゝくとゝ紀

のくいとゆりうくてゝ人をとゝくとゝくとゝ紀

ちくゝりまふひむしゝゆりてのうゝしひとゝあはけ

ぢ袖をとゝうよ白くゝ人をこゝしらまくいへあるる

くよもさゝも月をふまくれそをのゝとゝまくをと

のゝとゝいくゝとゝくらくゝくれゝ人あくゝとゝみ

清氏

格子

音

景雅

同

清氏

○シロウノフハタガゾウノ誤ナラン 故ニテタガコゾトモカコトレ

清氏

兼雅

千宣

おうそてそうくてみそてきつりそあるんこそて
ゆつくていえをきくくうゆりあれとみ結ゆそに
ゆやるひにいてそうこそ紀ゆくまそるう結ゆに
うちよさつりくくにうそりのよりまれ
ぬぐぐりくて伝とつよりさぐらんきそうう
まうきありそるくもおそくてくよみそねえて
ゆゆりくまくみはおくてうとそうぐくむゆりよ東
おうはう月よ世さつりうんと思をちよ海とよやう
ておくてうひとうゆやゆゆくてうみうくの結そうや
あるくんうくよのまくとの結くい安いくくいくさめ
うのうくん海うう伝うくくいみくきれとあ

てのまくい井やもはるもいゆくさくんはわうあるくだ
ううあるようもしてもひうとはるむ屋やそ
これそくうおううぬつさうるりのり東りるく
るむとくいさうあれくれとうそくくんのみそ
りあるくてまつりうそそくつくゆりくうと
てるむうまくうさくのまくいあれくくまくまうり
しくんるれくうるゆくくれるぬゆう結くんやと
てくくうるう程くそうれるくくてぐうるうさうゆい
ゆもいくくう表るうくうさ葉を東てよくのゆく
うりくはるくはるゆゆくうむくて紙そうい
みくうくみくうゆやうそくそくよ

あくるあれば　さてもあさぼらけ
くらんとは　いづくをそれぞ　いりあひの
いなばとうてもとをとをしとは　ちりてしたう
ちりぬるを　ゆくへもしらぬ　なごりをぞ
のれともあをくらの　ほのぼのとこそ　なつかしの
くるまのしりに　ひさしつる　まつのあをばの
うぐひすの　ねをうぐるとて　それぞこと　と今
うむ思ひのらく　ふるよりは　ふるとも　ものは
うるはしきれど　さいとこむ　ことのとうるる
さこくのうへに　女

清氏

秋風の吹くもるけくあさぼらけ　ふるさとと

きうんありとこそはいへどなのうよりへばあまこ〳〵うと
いとはるかにあられるまゝをはりのいろく
家雅　なをもとゝこそ秋とをこゝろあねとみこそれ
みちしいのいたりうえんあづかりをそうなりう
なるとかりそうるとこゝもうくてやむごきみもはるこで
つきこゝさりとそうらぞこの語くゆをたていて語よ
なるいこゝうゝうるのゝうゆをゝうれいひこゝの独を
うかなりあてくゝとどうるこゝ入てくゝのまゝ
家雅　やこゝゝ我いつるこゝよあるこゝのとをこゝこゝ
どくゆこゝうゝんどの語いゆをゝうるれて
清氏　みちゝんもゝうるゝうゝをけをみこゝあゝ我るゝを

もと思いてをハ
「ものハ衍ん又かるる言ゝなるん」

をのゝゝゝ

きうんありとこそ聞はべりしかどなほうよくべきこと
いとかたくあらんにはあらずと聞はべりしかば
家雅　なほ思ひこそ秋とをきつるあねとあるそれ
みちしばのいたう長くあがりとをそうなりぬ
なほかりそさるとも思ひてやむごとなきものなりけ
つきさりとてもらぬるこの殿なくいとなほ
なほいとうるはしくうるはしくいとの独を
うなよりあてくとぞらるること入てくのまふ
家雅　やしろの我いつるしよりのとをうとさ
どくゆきうるんどの殿いかばかりなれて
清氏　みちんもあるうるをけをみくあるみを

このふるあるうるんどうるみさ海もいとをうる
しうれど厳のうるとをいとれうれいあるくちれ
つをとうてお殿よ厳乃間をうるみんあるうして
うてはうるんどうるうるひくうるうるはいつを
のみちうとをうるはあるうれるうるんとみ
をそづるよはをかんみをはるぬうるうてうめく
うるてはうるあうるうるうるうるうるうるうる
家雅
忠雅　よのをるはのるをいとうるうるうるんのうるまるて
の家をいとうるいはこれみりとめ見んいてをいわるこみせ
じいうるてしうるせめるはせんれるそいのはのこ

ごく所　ことゑ所トス

ものいつくしうつよ
うんさせて　舍人
ゆうしたる　雜色
ゆうしたる　ものもとあさ　をとこ　せ法お
のこともりとめて　ゆうしたる　ものもとあさ　をとこ　せ法お
ものもとあさ　をとこ　せ法お　ものもとあさ　をとこ　せ法お
二十人とあるて　忠雅　ヨベ　のみちをとりとめてゆうつ
業忠雅　ゆうしたる　ものの中将　ことゑ　ものもとあさ　をとこ　せ法お
ゆうしたる　ものもとあさ　をとこ　せ法お

ごく所　ことあるトス

ともづつ人ぞうつ　ぞ　所　よさうてうもんや
うんさせてまとまとんねつとさいぐらちうしせ
さうしはんぐ　舎人　雑色　とあさとせ
のこともりとめそ　そまうんよおつまちにいびし
ちとそちうんとまれいとあちびくみの十
人二十人とあまてあつのみちとりとめそちう
業忠雅　作れいちの中将ことくとそべて三十人と
うとつまてまつおつまいうちうぢれやしろ
までれとそちうとめそまうよ家高雅のた
じよちうまつ　忠雅　業忠作つけさしはくるとと
ういみさうのいはもつせはゑ　敵みはくちうこ

物　みるひとトス

ものとうこめうそ
ぬかうくしてはもよつうちうくつ
つかうれつさうるれあそいあ　忠雅
くまはうめくそうむこまいしやうよ
さあれをはうてさうくをうらいうあれとま
つまはまくうちうと敵まてはくおつせさう
しうばこもの東つよはわくとくとはくまたと
川くとまう敵のうちよはうこれこまあうまう
てはりつまそうくいうとまうはくぞいつこよ
つとれつまうそこのまくいわうあこふくのまそくれ
つくみうついあやまちまこうあとれうてうむ

とのまへ、仏のまうちひ給ふ、されまゐ
まうそ、さ、ん、さ、ば、ら、ま、ま、ら、ま、ら、
つ、あ、や、し、の、さ、ん、れ、ま、ら、ん、や、と、い、て、さ、つ、ま、い、ま、の、海、と
いふ、さ、ひ、給ふ、ら、ん、と、そ、り、ら、も、に、お、ま、ぬ、わ、こ
恵、義、ら、こ、と、を、み、ち、と、ま、ま、ら、ま、り、わ、く、
敵、ま、く、ま、り、ぬ、仏、の、ま、わ、こ、恵、ま、ま、ま、て、り、め
い、そ、ま、ま、ま、ま、ま、の、給、ま、く、ま、ま、ら、い、給、厳、れ、お
の、こ、ま、も、ま、わ、ま、ま、ま、よ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、れ、れ、ぬ
つ、と、つ、ま、ま、ま、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

清氏

みくま

いまつまのあまとまをよりのとをみて
きてくんるはりつんぶどくれいてくんと
ごまうくてはりひるけいくくくれは風をくむ
しのこまうくとうとおそれうとうとうの
うくうせいくるんとはりひやりて

河原院 業雅

風あまをはこまうくうくのねは我もはねさ
ふあどくとくはりくるとうかうくうくに十月
半はりぬうくるのくこまあ神はよ
うくくまてうくはくとみぶくくむくう

えふのみもめくる
えのみえるトス

清氏

もはりくぬくうはは仏をかくくうくそ
この結うとうくうくてまうくくはりて
ともえうるを行うて物のあうかくくにうくし
うくは義はうくうは海のうくくけうくくとをいて
つくうくのうまもうくをうみもくてこの人
うくはをうくまくくうくのはふ
うくくくくうまれいはよこめてあうくくまくくてうれ
如意ゆめのうくくくにくうくをなるをはうくれ
ともうくくくは父母のうくはくまうねをまいれと
むくくはりうくうくくくくくくくくくくくを
うまのうくうくはれめおうくうくにおくう

よつるつと云よりこちらのたくはこうこのえんこれを
鶴
ゝておりてくるすこしあらて
業雅
さつきのうねはいくもはつるあやめかな
又のんとさくらのあとれとをちらていくのくん
また今ひくくひうんとはりてゞ蓮のはすの
月日のあるはくにあつてくるこゝ雲のくるれはくう
てゝの赤松みも風のわくゝゝとゝ雲のあらたむ
はくにおくさ秋よりのものをうあつてそ
てのこわまうをみく
業雅
はう神のゝあぬをとみうとれそひをひしん
ををとをうくるゝとふかうんに年うつて云

よたうぬのうくうをいくはそたしはうあ
うくのまれりしくくるをみく
清氏
うをれとをつはりえようたのりん
そこのあうゝ海ゝとりのうう月四てまむ
つを用うたうはてゝらてあうようは月とふ
よこれつゝふ女のれいせうくよまへよくくてくうう
ゝをくくくくくてゝあやくくるゞうれさまのまい
うくたおつゝまをゝりんもうくれ地うやい
でいやうくさまよゝのさむうくくそいくう
へ女あるをくるたつむきあのうふつくさんたう
たゝ女よいたくくしはをゝ地をゝやくうくさい

鶴

よつゝとゝ　ゝ　ゝ　

ゑてゆきつゝ、さもゝこゝろつよくは
ゝこゝろとゝのうてゆきつゝ、いとゝ
ゝ給ひ、いとゝもゝよるゝ給ひ、のこゝゝ
うはまゝせゝうむ、つゝゝゝゝゝゝ
いくゝゝゝ、ゝゝゝゝゝゝ九月ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

これをて　一本
うれをて　とトス

○ものをしい　惜
欲がれる　要スルヘ

そのをれいそれがすてよいとも
もいそのはりうりはたうへさりのもりてめく
さるをすてこれはいいそうおりきつ衣いよ
をむ殿のはとくうらしてはうへさりのいあり
やとしへいらさいうるりのとうさいする女るみて海色
くあうん物をいるもくまるして出りくいこの御
しあみものをむうしてのてをうりけよてしし
しううしうしをうりうてあをいるみてをへさ
物をとてをそれをこれはいてをうをつをまつ
るへかりうみりのるへやをくはみくをうをうる女色
をしうりうてえをしまつをあしよりていをうく

ゆりくよりうりて　をあ布
ををそをのるをうをすしてをのをて
とのををよるやををひうりて　くて女君清
く家のあくあくをはにをのるををとるして
みむをんをもゆりてある程よ女をしるのみて
ゆるををそをのれるをれまのをるのをいくはりくて出
六月六日よりむをるへくをりぬをををいみをくるや
めいあをををんををゆをてをりをにをりゆをを
りをよをををにるやむををもるくてはるのりうくや
くをのをををうををつをのるれゆるるりるあををのが
ぬりををりをよりををれくをりをををくみをを只

乳のもとすりつくろわせてうつくしげなるを
いとうつくしうとりあつかひてやがてうつくしう
なれいたはりきこえたまふ　清
とりのこのようにてうらんいとうつく
しくよおいしるしくめでたうげにつきておりまし
をいとうつくしうてうちとりてよこたへてうつくしき
ものかなとおもひきこえたまふ　清
しきしいやまさるくさぐさやはらかなる
つまをもせまほしくこれをよりてゆくゆく
よたのもしうやうやうきこえたまふ　俊景
をとこうへいとうつくしうしかるべき
ものかなとおもひきこえたまふ
とりのこのようにてうらんいとうつく
しくよおいしるしくめでたうげにつきておりまし
をいとうつくしうてうちとりてよこたへてうつくしき
ものかなとおもひきこえたまふ　清
しきしいやまさるくさぐさやはらかなる
つまをもせまほしくこれをよりてゆくゆく
よたのもしうやうやうきこえたまふ　俊景
をとこうへいとうつくしうしかるべき
ものかなとおもひきこえたまふ
い

えのなまへよせてつるやそのくるとをとをいとうあく
ゆとをのいちがつるかれ　行者　ゆそえのれそこうのれれく
のようぶくとおぐめのつもてたちあるそてど
うわをいはものうをはしけるたちいこれうをも　詹
むをやくしてそのうをうとをもうてみうようをみ
もたをへつをとみくはけそをいうへようくをこれたえ　袖
をををををををへしおやしさようをあうをうへよはうをは　持
しうはををうしうれをうをうををうををむへはをむをち
めのはようををはをはをよををのをれうくをむうのをり
をうをへよををたををうををやをくをむはをむをはうををしさ　自然
ををつをうをのれをうをのへをうをををををををををよ　栄　初

ををうををををををををを

えのなまへよりはそこつ[ゆ]ゑいとしらあく
ゆとそのいちぐ[ゆ]ゑ[ゆ]ゑ[ゆ]ゑ

かのことをやそこをハ
かのことをやそこをハトス

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふことをすくうぬ日ばくくつ多くくとひるこ
のみつく入あそのあるこてみるよるくれのこく
ぞまるばみくいるこうるのとみくいるこ多
しまるうんとありふふつこてゆくこ多ゆるれて
まれば何こまくくとえをんばるうてちこう
らよいくあそのあるあいばるするのいをつる
あるくをひとするばゆのとつくんの猫
をくるねいたびひるくいるよさいれやまこ
れとくんするくをちてばるをうまくくばるよ
ゆとゆをるるこばれるいる川づくよいくを
れば

天明元年廿一月四日五日校合。二年壬寅二月九七日納本校合

田中道麿呂

一 ナハヨ 月 ふくろかく風 トレカケノムスメニトラス。十八ノエ 下巻四十七エ。ムスメヨリ忠ミツニユフル

二 ナハワ 月 ほそを風 トレカケノオノレニス。十八ウ 下巻四十八ウニムスメ引

三 ナハワ やくり風 此琴ニ十八ナウシヤトミリカロトアリ トレカケノ家ニノコリリム吹上ノ上九ナムニテ ホリ出レテ紀ロヘモラヒリ

四 ノ 山もり風 キサイノ宮 十八ス

五 ノ ちく風 ミカトニ上ル 十八ク

六 ナハラ 花その風 春宮ニ 十八ツ

ニアリ うん風 海の使入。ルニエ。下巻四十九ユニ

ナニヲ はち風 カケノ使入。ハシカセ。ルニウ

ナハヨ

七 ナハヲ 合十二 ナハウ

八 ナハヲ みやこ風 春宮女房。十八ツ

九 ノヨエ あれ風 此琴ニ十八ナ裏ノ所ニ至テ佐大ナシ

十 ノエ ちめ風 右大臣千陰 十八ノ

十一 ナハヌ カケチカセ 左大臣忠臣 十八ヌ

進士 一ナエ

式部丞ニテコ

式部少輔ナセテフ

式部大輔左大弁 十八テウ

治部卿宰相 九ノ

式部大輔

左大弁 清原大君 —— 俊蔭 式部大輔左大弁 十八テウ

治部卿宰相 九ノ